
あの子じゃないけど君が好きだよ

秋川優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの子じゃないけど君が好きだよ

【Nコード】

N6512P

【作者名】

秋川優希

【あらすじ】

私 佐竹美穂の初恋の始まりは、はばたき学園の中学時代。

設楽の存在すら知らなかったあの頃から私は設楽が大好きだった。

設楽の姿を一目見た瞬間胸が高鳴り、設楽のピアノを聴いた瞬間恋に落ちた。

高等部に進学して設楽がはばたき学園の高等部に入学し、同じ教室で過ごしてきた。仲の良い女友達にもなれた。

だけど、せつかく手に入れられた友達の位置を崩すのが怖くて伝えられないでいる間に、設楽は私ではない後輩の女の子を好きにな

っていた。

そして、その女の子 相川杏子ちゃんが、設楽の数少ない友人である紺野と付き合い始めたと揃って報告に来た今日。

私は設楽に何をしてあげられるんだろう。

ねえ、私は杏子ちゃんじゃない。設楽の好きな杏子ちゃんにはなれない。

でも、設楽が好きなの。だから、設楽のそんな悲しい顔は見たくない。

ねえ、もう1度、あの強気な顔で笑ってよ。もう1度、私が好きになった音でピアノを弾いてよ。

ずっとずっと、好きだったんだよ。

1話（前書き）

この作品は、ときめきメモリアル girl's Side 3
rd Storyの二次創作で、なおかつノット公式ヒロインです。
原作をご存じない方、ノット公式ヒロインが苦手な方はご注意ください。

1話

設楽にとって心を許せる数少ない友人の紺野と、私にも可愛い後輩である相川杏子ちゃんが、揃って、「付合うことになったんです」と報告に来たのは、今日の昼休みのことだった。

私と設楽は3年間同じクラスの腐れ縁だし、紺野も1年の時はクラスメートだった。

私は知り合う前から設楽がずっと好きだった。

でも、せつかく知り合えて、ただの友人だけだからこそ他の女の子よりは近くに接してくれる、居心地の良い関係を失うのが怖くて、告白できないまま時間が過ぎて。

私たちは2年生に進級して、それぞれ1年後輩の相川杏子ちゃんと知り合った。

4人で結構仲良くなって、クラブもバイトもバラバラで、普段は別々に行動することも多かったものの、時折一緒にランチをしたり、休日は遊びに出掛けるような仲になった。

一緒にいる時間を重ねれば重ねるほど、わかってしまう。

杏子ちゃんに惹かれる設楽のことも。

いつの頃からか、少しずつ惹かれ合っていく、杏子ちゃんと紺野のことも。

楽しくないなら、苦しいだけなら、手放せる。

楽しくないわけじゃない。辛くなる時間が、無理して笑顔をつくる時間が、増えただけ。

だから、3人から離れられなかった。

手放せなかった。

大好きな人と、大切な友達と、可愛い後輩に囲まれたその空間は、それをしてしまうにはあまりにも惜しいように思えたから。

普段は嫉妬心も忘れて、「いい子」と認めて仲良くしてしまうほど、杏子ちゃんは可愛らしくて優しい子だったから、なおさらだ。

何よりも。

設楽の傍に居たかった。どんな形でもいい、設楽に必要とされたかった。

設楽にとって、女の子としての『好き』の対象になれないのなら、設楽が寂しいとき、悲しいとき。

頼ってくれる、必要としてくれる、いちばんの女友達になりたかった。

紺野と杏子ちゃんのことだって、いつかはこうなるんだろうとわかってた。

ただ、それが今日だとは予期してなくて、心の準備ができなかっただけ。

設楽と並んで、報告を受けながら、私は「おめでとう」の言葉すら、消え入りそうな声でしか言えなくて。

笑顔をつくったけどうまく笑えてない、張り付けたような作り笑いにしか見えないだろう。

きっと、酷い顔をしていた。酷い顔。醜い顔。
心の中では叫んでいる。

（設楽に、必要とされてるのに！こんなに、好かれてるのに！
私がどんなに欲しくても手に入らないもの、持ってるのに！

どうして気付かないの！？こんな残酷なこと、出来るの！？）
そう心で叫ぶ自分を、心底、嫌いになった。

（私って、こんなに性格悪かったんだ）
それを、思い知らされて。

羞恥心と、申し訳なさに、頭がぐらついた。
大切な友達なのに。

可愛い後輩なのに。
2人の幸せに、「おめでとう」の言葉さえ、満足に贈れない自分。

紺野も、杏子ちゃんも、悪くないのに。
ただ、設楽が杏子ちゃんを想うように。

私が設楽を想うように。

2人もお互いに想い合っただけなのに。
わかってるのに、杏子ちゃんに嫉妬してる。
どうしようもないほど、嫉妬してる。

こんなんじゃ、設楽が杏子ちゃんのほうに惹かれるのも当たり前前だ。

彼女の素直で清々しい心と私の醜い気持ちじゃ、比べる対象にすることさえおこがましい。

情けなさと、恥ずかしさと、惨めさに、内心、打ち震えながら、そっと、設楽の横顔を見つめた。

私より傷付いてるだろう設楽を心配するだけの心の余裕は、幸い、残されていたみたいだ。

その端正な顔にいつもの笑みを浮かべ、いつもと変わらない声音で「よかったな」と祝福する設楽の、けれど、どうしようもないほど悲しい瞳を見ていたら涙が込み上げて、慌てて抑えるのに苦労した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6512p/>

あの子じゃないけど君が好きだよ

2011年1月3日21時43分発行